

〈参考資料〉

・管内における監視伝染病発生状況（平成26年1月～12月）

- 1 家畜伝染病（予防法第2条）
 - ・発生事例なし
- 2 届出伝染病（予防法第4条）

病名	戸数	頭羽数	市町名
牛ウイルス性下痢・粘膜病	6	6	大田原市、那須塩原市、那須町
牛伝染性鼻気管炎	2	6	大田原市、那須町
牛白血病（散発性牛白血病）	1	1	那須塩原市
牛白血病	68	84	と畜場発見
牛サルモネラ症	1	1	那須町
豚サルモネラ症	1	1	と畜場発見
伝染性胃腸炎	1	3	那須町
豚流行性下痢	14	46	大田原市、那須塩原市、那須町、那須烏山市、那珂川町
豚丹毒	1	2	と畜場発見
ロイコチトゾーン病	1	1	県外食鳥処理場発見

・死亡牛 BSE 検査実施状況

1 月別検査実施状況

月	頭数				
	搬入	採材	検査	搬出	焼却
4月	304	319	335	300	0
5月	263	254	254	286	0
6月	259	256	242	244	0
7月	326	325	342	326	0
8月	359	345	346	358	0
9月	341	347	336	334	0
10月	304	310	314	313	0
11月	288	256	275	264	0
12月	317	334	307	317	0
1月	326	307	353	338	0
2月	294	289	289	298	0
3月	269	282	285	289	0
計	3,650	3,624	3,678	3,667	0

2 管内市町村別搬入頭数

市町村	ホルスタイン種	黒毛和種	交雑種	その他	計
大田原市	327	21	20	2	370
那須塩原市	1,203	76	6	3	1,288
那須烏山市	70	12	9	0	91
那須町	314	46	5	8	373
那珂川町	43	15	0	0	58
管内計	1,957	170	40	13	2,180

・管内の年別監視伝染病発生状況(過去10年間)

1 家畜伝染病

(戸/頭羽群数)

病名	畜種	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
ブルセラ病	牛	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
結核病	牛	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨーネ病	牛	13/28	20/41	14/35	9/12	8/15	8/28	17/49	5/7	4/7	-
馬伝染性貧血	馬	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
豚コレラ	豚	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニューカッスル病	鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
腐蛆病	蜜蜂	-	2/5	2/5	1/1	-	-	-	1/1	-	-

2 届出伝染病

(戸/頭羽群数)

病名	畜種	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
牛ウイルス性下痢・粘膜病	牛	-	-	3/3	4/6	3/3	2/2	2/3	2/3	5/8	6/6
牛伝染性鼻気管炎	牛	-	-	-	-	-	1/2	2/3	1/5	1/3	2/6
牛白血病	牛	2/2	2/2	1/1	1/1	-	-	34/43	38/43	57/68	69/85
破傷風	牛	2/2	-	-	-	-	1/1	-	-	-	-
気種痘	牛	-	-	-	-	-	1/1	-	-	-	-
サルモネラ症	牛	2/28	-	1/17	-	2/5	5/7	3/5	2/8	3/8	1/1
馬インフルエンザ	馬	-	-	1/8	-	-	-	-	-	-	-
サルモネラ症	豚	-	-	1/10	-	-	-	-	-	2/2	1/1
オーエスキー病	豚	-	-	-	-	1/3	-	-	-	-	-
伝染性胃腸炎	豚	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/3
豚繁殖・呼吸障害症候群	豚	-	-	1/1	-	-	1/2	-	-	-	-
豚流行性下痢	豚	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14/46
豚丹毒	豚	5/5	-	-	-	-	-	5/7	2/2	1/3	1/2
マレック病	鶏	-	-	-	-	-	1/3	-	-	1/2	-
ロイコチトゾーン病	鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/1

- : 摘発事例なし

・管内市町別家畜飼養戸数、飼養頭羽数

表中の数値は、全国は畜産統計から引用（ブロイラーは平成21年値）、栃木県は「とちぎの畜産2014」から引用、管内は当所調べ。

1 家畜飼養戸数

(単位：戸)

市町	畜種	乳用牛	肉用牛	馬	豚	鶏（飼養羽数300羽以上）	
						採卵鶏	ブロイラー
大田原市		75	142	1	6	6	1
那須塩原市		319	118	14	14	6	0
那須町		99	181	15	16	1	1
那須烏山市		26	33	2	8	4	0
那珂川町		19	31	3	8	2	1
管内計		538	505	35	52	19	3
栃木県		827	1,160	83	136	71	9
全国		19,400	61,300	5,041	5,570	2,650	2,392

2 家畜飼養頭羽数

(単位：頭、羽)

市町	畜種	乳用牛	肉用牛	馬	豚	鶏	
						採卵鶏 (種鶏含)	ブロイラー
大田原市		4,714	12,387	16	36,319	767,126	30,000
那須塩原市		23,322	8,736	241	50,265	24,306	0
那須町		7,937	11,236	129	69,044	4,450	20,000
那須烏山市		2,082	12,795	24	81,229	5,588	0
那珂川町		1,081	1,685	5	4,938	990	25,500
管内計		39,136	46,839	415	241,795	802,460	75,500
栃木県		53,000	92,900	951	385,300	3,796,000	662,772
全国		1,423,000	2,642,000	75,119	9,685,000	172,238,000	107,141,000

3 家畜飼養頭羽数の推移（栃木県）

(単位：頭、羽)

年	畜種	乳用牛	肉用牛	馬	豚	採卵鶏	ブロイラー
昭和60年		65,000	86,000		302,600	3,679,000	1,508,000
平成2年		66,900	103,800		307,300	4,054,000	906,000
7年		64,100	103,900		303,500	4,439,000	626,000
12年		60,700	105,200		319,600	4,393,000	
17年		58,300	98,100		336,500	4,256,000	
20年		56,700	102,300		369,800	3,938,000	
21年		55,900	102,100		376,100	3,904,000	
22年		53,900	99,100		368,840	3,974,000	
23年		53,000	94,200	951	391,100	3,813,000	662,772
24年		53,000	92,900		385,300	3,796,000	
25年		55,301	93,283	984	386,293	4,206,254	535,297
26年		52,900	87,900		393,200	3,969,000	

・管内飼育動物診療施設数等

(平成27年3月末)

区 分	大動物	小動物	計
県	2	0	2
農協・酪農協	3	0	3
法人	30	6	36
個人	34	16	50
計	69	22	91

・家畜の主な伝染性疾病

1 家畜伝染病（予防法第2条関係）

家畜伝染病予防法では、家畜伝染病が28疾病指定されているが、主な疾病の概要は下表のとおり。

伝染性疾病の種類	家畜の種類	病原	予後	症状等
口蹄疫	牛、めん羊、山羊、豚 など	ウイルス	罹患率は高いが、死亡率は低い。経済的被害大	鼻、口部の粘膜、蹄周縁部の皮膚などに重篤な水疱性病変を生じる急性伝染病。日本では、2000年に92年ぶりに発生。2010年には宮崎県において292例の発生があった。
流行性脳炎	牛、馬、めん羊、山羊、豚 など	ウイルス	症状等を参照	日本脳炎、西部馬脳炎、ベネズエラ馬脳炎等脳炎を起こすアルボウイルスによる感染症をいい、日本では現在日本脳炎のみがみられ、馬では死亡・予後不良、豚では死産・無精子症等を発現する。
ブルセラ病	牛、めん羊、山羊、豚 など	細菌	不定	流産が主徴。人にも感染する。日本では2010年2頭発生、本県では1971年以降発生なし。
結核病	牛、山羊など	細菌	不定	主に肺、リンパ節に進行性の結核病変を形成。本県では、1975年以降発生なし。
ヨーネ病	牛、めん羊、山羊 など	細菌	不定	原因不明の頑固な持続性間欠性下痢、消瘦、貧血。近年、増加し全国的に散発的に発生。
伝達性海綿状脳症	牛、めん羊、山羊 など	プリオン	不良	行動異常、運動失調、興奮状態、搔痒感等。日本では2001年から散発。（牛海綿状脳症=BSE[国内では現在36例目]、めん羊：スクレイピー）
馬伝染性貧血	馬	ウイルス	不定	特有の回帰熱。発熱に伴い貧血。慢性の経過をとり生涯治癒しない。日本では1993年以降感染はなかったが、2011年3月に宮崎県で感染が確認された。本県では1980年以降発生なし。
豚コレラ	豚など	ウイルス	極めて不良	急性熱性伝染病。伝染性極めて強く、症状は重篤で致死率も非常に高い。日本では1991年以降、本県では、1983年以降発生なし。2006年ワクチン接種全面中止、2007年に清浄国に認定された。
高病原性鳥インフルエンザ 低病原性鳥インフルエンザ	鶏、あひる、うずら など	ウイルス	死亡率高い	特定の型のA型インフルエンザウイルスによるものと、急性で罹病率・致死率の高いインフルエンザ感染をいう。肉冠チアノーゼ、顔面浮腫、鼻汁、神経症状。日本では2004年に79年ぶりに発生し、それ以降2011年まで毎年発生あり。
ニューカッスル病（低病原性の場合、届出）	鶏、あひる、うずら など	ウイルス	死亡率高い	体温上昇、元気食欲なく、緑色下痢便、呼吸器症状を呈す。本県では、1986年以降発生なし。ワクチンにより防御している。
家きんサルモネラ感染症	鶏、あひる、うずら など	細菌	雛の死亡率高い	ひな白痢は、羽毛逆立、元気消失、灰白色下痢便。耐過した場合、発育不良、保菌鶏となる。 鶏チフスは、育成鶏、成鶏に多発し産卵率低下。本県では、1984年以降発生なし。
腐蛆病	蜜蜂	細菌	不良	巣房の蓋が湿気を帯び陥凹し蜂子が死亡。本県での発生頻度は比較的高い。

※ 疾病により、政令でその他の家畜（水牛、しか、いのしし、七面鳥）が指定されている。

2 届出伝染病（予防法第4条関係）

家畜伝染病予防法では、届出伝染病が71疾病指定されているが主な疾病の概要は下表のとおり。

伝染性疾病的の種類	家畜の種類	病原	予後	症状等
ブルータング	牛、水牛、しか、めん羊、山羊	ウイルス	不定、牛では良性	発熱、異常産、口腔粘膜の潰瘍等。吸血昆虫媒介。本県で過去に発生あり。
アカバネ病	牛、水牛、めん羊、山羊	ウイルス	不定	早産・流産・死産、子牛の体型異常、大脳欠損。吸血昆虫媒介。本県で発生あり。
チュウザン病	牛、水牛、山羊	ウイルス	不定	異常産（大脳・小脳欠損）。吸血昆虫媒介。本県は発生なし。
牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD・MD)	牛、水牛	ウイルス	不定、粘膜病は不良	発熱、発咳、流涎、下痢、流産（奇形）。免疫寛容になった牛は、ウイルスを生涯保有。常在。
牛伝染性鼻気管炎(IBR)	牛、水牛	ウイルス	致死率3～10%	発熱、発咳、鼻汁漏出、流涎等。常在。
牛白血病	牛、水牛	ウイルス	不良	削瘦、眼球突出、全身リンパ節の腫大等。常在。
アノウイルス感染症	牛、水牛	ウイルス	不良	妊娠牛が本ウイルスに感染すると、子牛に小脳形成不全。吸血昆虫媒介。本県は発生なし。
イバラキ病	牛、水牛	ウイルス	一般に不良	嚙下障害を主徴とする急性熱性伝染病。吸血昆虫媒介。本県は発生なし。
牛流行熱	牛、水牛	ウイルス	一般に良性	急性熱性伝染病。本県では発生なし。
サルモネラ症	牛、水牛、しか、豚、いのしし、鶏、あひる、七面鳥、うずら	細菌	不定、慢性経過もある	指定された病原体によるものに限る。敗血症、衰弱、下痢等。食中毒の問題も大きい。常在。
ネオスポラ症	牛、水牛	原虫	神経症の子牛は不良	流産、死産。常在。
馬インフルエンザ	馬	ウイルス	経過日数は2～3週、重症の場合は1～6月	発熱、発咳、鼻汁漏出、流涎。2007年に36年ぶりに全国的に発生（管内では2007年8月に発生）。
馬伝染性子宮炎	馬	細菌	10～14日	陰門部から粘稠性に富む灰白色の滲出液を多量に排出。常在。
馬バラチフス	馬	細菌	生後間もない子馬では不良	流産、子馬の関節炎、腱鞘炎等。日本では、1998年、1999年、2003年、2004年、2009年に発生あり。
トキソプラズマ病	めん羊、山羊、豚、いのしし	原虫	多くは慢性	発熱、チアノーゼ、腹式呼吸。常在。
オーエスキー病(AD)	豚、いのしし	ウイルス	若齢豚ほど不良	新生豚では高率に死亡。成豚ではほとんど無症状で耐過。妊娠豚では異常産。感染耐過豚は、感染源となる。本県では散發。陽性農家多い。
豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS)	豚、いのしし	ウイルス	1～8週、子豚は不良	繁殖障害、呼吸器障害。他の疾病の引き金となる。常在。
豚流行性下痢(PED)	豚、いのしし	ウイルス	ほ乳豚は高率死亡、成豚は良	水様性下痢。2013年10月、我が国では7年ぶりに発生。以降、全国的に大流行。2014年9月以降では、平成27年4月現在、25都道県200農場において発生が確認されている。

伝染性疾病の種類	家畜の種類	病原	予後	症状等
豚丹毒	豚、いのしし	細菌	敗血症型は高死亡率	敗血症型、蕁麻疹型、心内膜炎型、関節炎型がある。常在。と場廃棄が多い。
鳥インフルエンザ	鶏、あひる、七面鳥、うずら	ウイルス	—	呼吸器症状、産卵低下。高病原性鳥インフルエンザ以外のものをいう。
鶏マイコプラズマ病	鶏、七面鳥	マイコプラズマ	致死率10%	呼吸器症状。通常は、無症状だが経済的被害大。常在。

3 その他の伝染性疾病

- 牛コロナウイルス病
下痢を主徴とする。子牛では常在化の傾向があり、成牛では舎飼の搾乳牛で冬季に好発する。
- 牛ロタウイルス病
下痢を主徴とする疾病。寒冷期に、新生子牛に好発する。成牛にもまれに発生する。
- 牛RSウイルス病
呼吸器症状を主徴とする。頭部、頸部、背部に皮下気腫が認められることがある。寒冷期に、年齢に関係なく発生する。
- 牛パストツレラ症
細菌による呼吸器症状を呈する疾病。飼育環境・気候の急変、長距離輸送等のストレス感作があったときに発生が多い。
- 牛大腸菌症
出生直後～2週齢ころに好発する下痢を主徴とする疾病で、ときに急死する。
- クリプトスポリジウム症（牛）
原虫による水様下痢を呈する疾病。幼若個体に好発する。
- 小型ピロプラズマ病（牛）
放牧牛において多く発生し貧血を呈する原虫病。家畜伝染病に指定されている疾病とは病原体が異なる。
- コクシジウム病（牛）
幼若個体に好発し、下痢便、血便を呈する原虫による病気。
- 牛肺虫症
夏季放牧牛に発生する、寄生虫（線虫）による発咳を主徴とする疾病。
- 馬ロタウイルス病
1～3か月齢の子馬に流行する一過性の下痢。
- 豚ロタウイルス病
離乳期前後に多発する水様下痢。発病率は高いが致死率は低い。
- 離乳後多臓器性発育不良症候群（豚）
ウイルスが関与して起こり、2～3か月齢離の乳子豚が発育停滞あるいは消瘦する病気。いわゆるヒネ豚の原因となる。
- 増殖性腸炎（豚）
細菌により回腸粘膜が肥厚、タール様血便、貧血。肥育豚や種豚の病気。
- 豚胸膜肺炎
4～5か月齢の豚に好発する、細菌による疾病。発熱、呼吸困難、神経症状を呈する。甚急性例では24時間以内、急性例では2～4日で死亡する。
- 豚ヘモフィルス・パラスイス症
5～8週齢の子豚に好発する、発熱、嘔吐、神経症状、関節炎等を呈する疾病。
- 豚大腸菌症
1～3週齢の子豚に好発する下痢。敗血症死する場合もある。
- 豚レンサ球菌症
レンサ球菌により発生する病気で、髄膜炎型、敗血症型、多発性関節炎型、心内膜炎型、頸部膿瘍型がある。
- 鶏コクシジウム病
幼若雛に好発する、血便、下痢便、肉様便を主徴とする原虫による疾病。